

機関番号 : 34416

研究種目 : 基盤研究(C)

研究期間 : 2008 ~ 2010

課題番号 : 20520033

研究課題名 (和文)

新資料の基礎的研究によるディルタイ哲学の再構築－「現実と経験の哲学」として

研究課題名 (英文)

Re-construction of Dilthey's Philosophy as "Philosophy of Actuality and Experience" on the basis of the fundamental research of new data

研究代表者 山本 幾生 (YAMAMOTO IKUO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号 : 00220450

研究成果の概要 (和文) :

ディルタイの哲学は、従来、「生の哲学」「解釈学の哲学」とされてきたが、本研究では、①彼の哲学では、現実形成が意志的な作用概念から考えられていること、そして②彼固有の経験概念が特殊から特殊への類比に基づいて形成され、類比的把握それ自身が現実の経験として現実を形成していること、③これらを「新資料の基礎的研究」に基づいて解明することによって、彼の哲学を「現実と経験の哲学」、すなわち「意志的・類比的経験としての現実形成の哲学」として再構築した。

研究成果の概要 (英文) :

The result of this study is divided into three; ①the building of "Actuality" is thought from the concept of "Willing Action" in his philosophy; ②his own concept of "Experience" is formed by analogy from one particular to other particulars, and the grasp by the analogical inference is the experience of actuality itself, and therefore, builds actuality; ③these analyses could be done on the basis of "the fundamental research of new data". Dilthey's philosophy, until recently, is counted as "Philosophy of Life" or "Philosophy of Hermeneutics", but by above, presented as "Philosophy of the Building of Actuality as willing and analogical Experience".

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 哲学、哲学・倫理学

キーワード: 西洋哲学、ディルタイ

## 1. 研究開始当初の背景

従来、ディルタイは精神科学の基礎づけを求めて、生を心理学的に分析し、その根底に意志を見出したことから、ショーペンハウアー、ニーチェとともに「生の哲学者」に数えられたり、また、晩年(1900-11)に解釈学の成立の書を著したことから「解釈学の創始者」

とみなされてきたりした。しかも、意志を含む心的生に関するディルタイの心理学的分析は、当時の心理学者(エヴィングハウス)から徹底的に批判され、これによってディルタイは心理学的分析を放棄して、理解概念を中心にした解釈学へ移行したのだ、という見方が一般的になっている。解釈学の展開のなか

でボルノー『ディルタイ』(1936)『理解』(1949)そしてダガマー『真理と方法』(1960)によって形成されてきた見方が、これである。

しかし『ディルタイ全集』第19巻(1982)において、彼の遺稿を主とした新資料が公刊され、ドイツでは「ディルタイル・ネサンス」と呼ばれる動向(ボルノー『ディルタイとフッサール』1985)がおこり、その中で遺稿が順次公刊された。それらの新資料によると、理解概念は最初期より解釈学の重要性とともに語られており(1990年公刊20巻所収の「ブレスラウ講義(1867/68)」など)、また心理学的分析は晩年まで行われていたのであり(2004年公刊24巻所収の「1904年以降の心理学関係草稿」など)。心理学と解釈学は彼の哲学では最初期から晩年まで並存しながら進んでいたのである。

それでは、心理学と解釈学、そして意志と理解は、どのように関連しているのか。また、彼の哲学全体はどのように再構築されるべきなのか。これが近年のディルタイ研究の中心問題の一つである。

ドイツでは、心理学と解釈学、そして意志と理解、これら双方を統一的に捉える試みが出始め(フェールマン「解釈学と心理学」『ディルタイ年報』9巻(1994/95))、国内でも『ディルタイと現代』(西村ほか編、2001)が全体像に迫ろうとし、また新資料を含めた日本語版『ディルタイ全集』(西村ほか編集代表、2003-)が刊行中であり、本研究申請者は『ディルタイと現代』には分担執筆者として、日本語版『ディルタイ全集』には訳者および編集校閲者として携わりながら、論文「理解について」『ディルタイ研究』(日本ディルタイ協会)(2004/05)で理解と意志との関連に関して、理解が意志的な追体験によって成り立つことを解明し、意志と理解の関連を提示した。これが本研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

以上の研究状況を背景にして、本研究は理解と意志の関係を包含して成立している現実と経験に焦点を当てた。これはディルタイの考える精神科学の対象が「歴史的社会的現実」とされているがゆえに、理解も意志も、かかる「現実」の中での働きとなるからである。ここから本研究の問いは次のように設定されている。すなわち、現実とはどのようなものであり、どのように把握され、また哲学はそれにどのように関わりうるのか。

この問いに対して、本研究は、彼の哲学を「現実と経験の哲学」として再構築することを目的とした。それは、自己と他者の相互作用の多様な経験の広がり(個人的、集团的、文化的、歴史的など)の中にこそ現実の形成があり、したがって現実の把握もその経験に遡って理解(追体験)することによって、把

握それ自身が現実の一つの経験となって現実の形成に関与する、そのような哲学である。

これに対して、従来、彼の哲学は「生の哲学」あるいは「解釈学の哲学」として理解されてきた。しかしこれは、心理学から解釈学への転回という、従来のディルタイ理解に基づいたものであり、近年の新資料により修正されつつある。本研究も新資料に基づき、しかも彼の個々の中心概念(現実、経験、生・意志、理解・解釈、作用連関など)を基礎的文獻的意味分析によって関連づけながら、彼の哲学全体を「現実と経験の哲学」として再構築することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が行うテキスト分析などの、いわば〈研究室内研究〉と、それを点検再吟味して深めるために行う他の研究者との意見交換、研究会の開催などの〈研究室外研究〉に分けられる。

〈研究室内研究〉としては、①ディルタイの中心概念の用法などに関するテキストデータの蓄積・整理(データベースの作成)とその意味分析を行った。②この意味分析の手掛かりのために、二次文献資料を三分野にわたって収集・分析した。三分野とは、ディルタイ関係、理解概念の解明のための解釈学関係、そして意志概念の解明のためのショーペンハウアー・ニーチェ関係、である。

〈研究室外研究〉としては、中心概念の意味分析を深めるためにテキスト講読を主とした研究会と、広く研究者相互の意見交換のなかで本研究の対外的な批判・評価を得るためにテキスト研究を主とした研究会、これら二つの形態の研究会を開催した。本研究では両者を「ディルタイ・テキスト研究会(テキスト講読、テキスト研究)」として、2カ月に1回程度の割合で、研究3年間で計20回開催した。

## 4. 研究成果

以上の目的と方法によって、申請時の研究計画に従った各年度の研究目標に応じて研究をすすめ、成果をあげた。それをまず年次順(以下、1. 2. 3)に挙げ、そして最後(以下、4)に本研究課題の総括的成果を挙げる。

(1)平成20年度:ディルタイにおける理解と意志の関係を明らかにすることを目標とし、まず、意志概念について、ドイツ哲学の中で意志概念が前面に現れたショーペンハウアーに遡り、ニーチェを経由してディルタイに至る道筋を解明した。そしてこれによって、ディルタイにおける意志概念の特徴を明瞭にし、かくしてそれが理解概念を形成していることを明らかにした。具体的な成果は以下の通りである。

まず、ショーペンハウアーにおいては、従来の研究では、意志概念が実体的あるいは超越論的に解釈されてきたが、本研究では、それが道徳的行為の原動力とされる伝統的な自由意志とともに、意欲や欲求など内的に体験されるものを含みながら、ある目的充足を目指した「作用」という意味を基本にしている点を解明した。

そしてこの解明によって、ショーペンハウアーにおける意志概念の研究に新たな視角を切り開くと同時に、ショーペンハウアーを端緒にしてニーチェを経てデイルタイに至る「意志の系譜」の提示を可能にした。すなわち、ショーペンハウアーにおける「作用」としての意志を端緒にして、ニーチェにおいてはそれが力への意志として「力」という意味が込められ、かくしてデイルタイに至って、「作用」と「力」は「心的生」の中に吸収され、それらは心的生における「抵抗体験」の「作用・反作用」へと展開するのである。とりわけ彼の使う「意志インパルス」という用語は、彼の言う「意志」が生理学的レベルでの作用概念を基本にしていることを意味している。ここに、ショーペンハウアーからニーチェを経てデイルタイへ至る意志概念を貫く基本的な意味が見出せるのである。

かくしてデイルタイにあつては、意志的な抵抗体験としての作用・反作用において、自己と他者との区別と同時に理解（追体験）が成立するのである。ここでは、理解概念は単に知性的ではなく、意志的である。すなわち、デイルタイの理解概念は、他者の心的生の意志的抵抗体験の中での追体験として、したがって他者の心的生への意志的作用・反作用として、形成されているのである。

本研究は以上の点を、『デイルタイ全集』第21・22巻所収の、心理学的分析に関する遺稿をパソコン上で検索可能なテキストデータベースに構築し、とくに心的体験における斉一性概念の意味変遷の探求を通して解明した。すなわち、デイルタイの斉一性概念は、自然の法則性に対する心的生の規則性として取り出され、これが人間本性の斉一性の分析に通じ、かくしてこの斉一性に基ついた人間相互の理解が自他の意志的な抵抗体験の中で可能になる。と同時に、人間本性の斉一性の内部で、個性や歴史的特殊性が分析可能になる。かくして、斉一性と特殊性の解釈学的な理解による「歴史的世界の構築」への道筋は、心的生の心理学的分析によって可能になっているのである。この点を新資料の遺稿から解明できたことは、デイルタイが心理学から解釈学へ転向したという従来の解釈に反対してデイルタイ哲学を再構築する手掛かりになったと同時に、彼の斉一性概念のより詳細な意味分析が次年度の課題となった。

(2) 平成21年度：前年度の成果を受け、意志概念から個々の中心概念の意味連関を重点的に分析することを目標とした。個々の中心概念としては、斉一性、構造、構造連関、というデイルタイ哲学の基礎概念を取り上げ、その解明を行った。その成果は以下の通りである。

従来のデイルタイ研究では、構造、構造連関そして斉一性は、ともに人間に本質的普遍的なものとして解釈され、しかもそうした普遍的本性を前提することに対して、デイルタイ批判がなされてきた。しかし本研究では、とりわけ斉一性概念の意味変遷を新資料の初期草稿にまで遡って検討することによって、そうした解釈がもはや妥当しないことを明確にした。そのさいに本研究でとくに注目したのは、初期の遺稿の中でも、デイルタイのJ.S.ミル解釈に関わる初期論理学講義である。

デイルタイはそこで、J.S.ミルの帰納推論が普遍化を目指したものであることを批判し、どこまでも特殊から特殊への推論としての経験的な類比を提示する。すなわち、デイルタイは、従来の研究でよく誤解されたように、「人間本性」を前提しているのではなく、また経験論が帰納の前提とした「自然の斉一性」に基つくのもなく、したがって演繹でも帰納でもなく、むしろ類比（アナロジー）を分析の方法論的な手掛かりにしたのである。したがって彼の斉一性概念は、普遍化されたものではなく、類比によって捉えられる類似性に基ついた経験的な概念として形成されている。それ故に彼が人間本性を斉一性に求める場合でも、「本性」そして「斉一性」という概念は、普遍的本質ではなく、どこまでも経験的な類比によって得られた限りでの規則性を意味しているのである。

したがって、このような斉一性概念からえられる構造と構造連関の概念も、人間の本質的な普遍的構造を意味するのではない。むしろデイルタイの分析は、本研究前年度に明らかにした心的生の意志的相互作用を中心にして、斉一性から連関へ、連関からその統一性へ、そして合目的性をへて構造連関そして人間本性の斉一性へ進む。すなわち、斉一性はどこまでも経験概念である以上、個々の心的事象がどのように連関するかが問題となり、そしてその連関を統一的に形成する要となるものとして生の合目的性に向かい、かくして合目的的に統一的に形成されたものが、構造連関・人間本性として語りだされたのである。

ここで本研究が注目したのは、次のような重層した道筋である。すなわち、斉一性から合目的性に至った段階で、合目的性という概念が「体験」と「意味」という二側面から把握され、前者は「表象・感受・意志」として、

後者は「現実・目的・価値」として展開され、双方が一つになって「構造連関」の中に含意されているのである。これは方法論的には、前者の「体験」は心理学的分析の対象になり、後者の「意味」は解釈学の対象になり、年代的には、前者が深まるに従って後者が前面に出てきたのである。このような中心概念の意味分析によって、心理学と解釈学との関係は、従来の解釈と違って、重層的に展開されていることが確認された。

本研究はこのように、初期・中期における道筋から、晩年の解釈学への道筋を見届けることができると同時に、「歴史的世界の構成」へ至る道筋を見通すことができるのである。すなわち、晩年の中心概念である「作用連関」は、まさしく中期の心理学的分析による「構造連関」が先駆的名称となった用語であり、したがって、「心的生の構造」と「価値・目的・現実」との「連関」を含意した概念である。言い換えれば、これら二側面を包含して歴史的世界の「法則性」を表そうとした概念が、斉一性の心理学的分析を出発点にした「構造連関」から解釈学を経由して語られた「作用連関」である。ディルタイの晩年の試みである「歴史的世界の構成」は、このような作用連関から「歴史的社会の現実」を捉える試みにほかならない。

このように、心理学的分析で語られた体験・斉一性・連関・構造、そして解釈学で語られる意味・価値・目的・現実、これら両者は同じ一つの生の基本的な構造・連関として分析され、「構造連関」そして「作用連関」という彼独自の鍵概念を結実させ、これによって現実の形成が捉えられようとしたのである。かくして、ディルタイ哲学を「現実と経験の哲学」として再構成するという本研究は、彼の思索の展開に沿って、とりわけ彼の中心概念の意味分析によって、確認されると同時に、次年度における「経験」概念の詳細な意味分析を残すまでとなった。

(3) 平成22年度：本年度は本研究最終年度としてディルタイ哲学を「現実と経験の哲学」として再構築することを目標にし、その鍵概念である「現実」と「経験」から、とりわけ後者の経験概念からのアプローチを試みた。

①「現実」に関しては、すでに本研究平成20年度の成果である、ショーペンハウアーからディルタイに至る意志概念の変遷の解明を基礎にし、そこで明らかにされた作用概念からディルタイの現実性概念の形成を解明した。すなわち、ディルタイにおける「作用」は、一方では心理学的分析の中で、心的生の意志インパルスとして、自己と他者の意志的な相互作用的な区別と同時に追体験とを形成し、他方では解釈学的基礎づけの中で、追体験を

基礎にした表現の理解が部分と全体との循環を繰返しながら、理解の多様な経験の広がり（個人的、集団的、文化的、歴史的など）である「歴史的社会の現実」を形成するのである。意志的な作用が相互作用として展開して現実が形成されるのである。

②「経験」に関しては、ディルタイが最初期から英国経験論とりわけ J.S. ミルとヒュームに関心を持ちつつ、しかし「経験論」に対して自らを「経験の哲学」として峻別している点に注目した。そして、本研究平成21年度の成果である J.S. ミルへのディルタイ批判に関する解明を基礎にして、さらにヒュームに対するディルタイの批判的受容を追跡することによって、ディルタイ独自の経験概念の形成を解明した。その成果は以下の通りである。

まず、年代的追跡を以下の通り行った。ディルタイは初期論議学講義である 1865/66 年「哲学的科学の論理学と体系の梗概」の中で初めてミルの『論理学の体系』を参照文献に挙げ、それからほぼ 10 年後の「人間・社会・国家に関する学問史の研究について」(1975)の中で、ミルの名前とともに「精神科学」という用語を挙げている。この 10 年間は、精神科学の基礎づけを認識論的基礎づけとして具体的に着手した「プレスラウ草稿」を含む 1980 年前後の直前になる。

そうであれば、この 10 年間に、ディルタイは「精神の学」の基礎づけを目指しながら、「道徳科学」を自然科学的に基礎づけようとしたミルを介して、しかもミルを批判的に吟味することによって、自然科学的方法に反対しながら自らの方法論の原型を形作っていったとみることができるのである。

本研究ではそれを、ミルの求めた〈帰納による普遍〉に対する〈類比による連関〉として特徴づけた。すなわち、ディルタイはどこまでも経験に留まり、従って推論も特殊から特殊への類比推論に留まり、類似生にも続く限りでの規則性(斉一性)を求めたのであり、ここからミルの試みを、帰納によって普遍を求めていると批判したのである。したがって 80 年代以降、体験に基づいて心理学的に分析される人間の本性も、そしてこの心的生の追体験としての理解に基づいて解釈学的に構築される歴史的世界も、自然科学的な〈帰納による普遍〉ではなく、〈類比による連関〉として分析され、形成されていくのである。これによってまた、精神科学固有の客観性が確保されようとしたのである。

ディルタイはこのようなミル批判を基礎として、ヒュームに対しても、ヒュームが意識の事実の分析を進めた点を評価しながらも、以下の二つの点を批判することによって自己の経験概念を形成する。一つは、ヒュームに対して知覚・覚知と表象とを区別して意識の

二つのあり方を提示することによって、意識の事実を、それ自身意識のあり方である覚知によって確認されうるものとする。もう一つは、ヒュームのように意識の事実を個別的私的な意識として捉えることに反対して、私的個を越えて他の個へも及んでいる連関を含んだものとして意識の事実を捉える。これはディルタイにおける経験が自己と他者との意志的な作用・反作用として成立していることから裏付けられる。彼が「意識の事実」と言うさいの「私の意識」とは、経験論において個々の感覚を受け取る個人的認識主観ではなく、私と他者と区分と関係が連関として成立してくる「意識の事実」として、私的個を越えた「連関」を含んでいるのである。

このようにヒュームを介したディルタイの関心は、1880年前後、心的生の経験を場面にして、ヒュームが考えたように要素から連合によって心的生の統一体が形成されるのか、それとも心的生の連関した統一体が要素へと分解されるのか、という問いにあったと言える。ここで、前者を批判して後者を主張する場合であっても、心的生の統一体の形成はどのようになされるのか、また連関がどのように形成されるのかが問題になるのである。この問題に対してディルタイは、連関の形成を何らかの経験されない力を持ち出して説明するのではなく、むしろ連関の形成自身が心的生の事実として、しかも意志的な合目的性に基づいた目的連関として統一的に形成・経験されている、と分析するのである。

ここで本研究が注目したのは、ディルタイがヒュームと同じ論点を出発点にしているということである。それは、単独の表象はあり得ないという論点である。ここからヒュームもディルタイも連合・連関へ向かうが、ヒュームはロックの経験論を前提し、感覚経験を単純な要素とみなして認識論の出発点としたのに対して、ディルタイはヒュームを批判して連合のプロセスは経験されていないとし、意識の事実に基づいて、そこに合目的な連関の形成を分析するのである。ここに、ヒュームの「経験論」とディルタイの「経験の哲学」の根本的な違いがある。

それ故にまた、ディルタイは、ヒュームの連合からその原理を求める連合心理学（構成的説明的心理学）へ進まず、それに反対して、ヒュームの連合を構造連関として捉え直す記述的心理学を提示し、構造連関の統一性を意志的な目的連関に求めたのである。

このように、ヒュームの連合に反対して連関から構造連関、そして目的連関へ至る道は、ヒュームの経験論・認識論・心理学を対立項とみなすことによって、自らの経験概念・認識論・心理学を確立していく道であった、と見ることができるのである。

#### (4) 現実と経験の哲学

以上のようにディルタイの哲学は、われわれの生における「現実」の「経験」を、方法論的には、意識の事実を認識論的に基礎づけながら心理学的に分析すると同時に解釈学的に把握しようとする哲学である。しかも解釈学的な把握は、表現の理解として、それ自身意識の事実に基づいた生の作用連関として現実を形成するのである。したがって、ディルタイが方法論的に心理学から解釈学へ転回したという従来の解釈は維持できず、また彼の哲学を生の哲学あるいは解釈学の哲学とみなす解釈も一面的な見方にすぎない。むしろ彼の哲学は、解釈学と心理学の双方を方法論的に含んだ、「歴史的社会的現実」の「経験の哲学」にほかならないのである。

この場合、経験とは、心的生全体の意志的経験を意味する。と同時に、この意志的な経験は、自己と他者との相互的な作用・反作用のなかで、自己とともに他者を類比的に経験し、生の統一体を作用連関・目的連関として形成していくのである。それゆえにこそ、歴史的社会的現実とは、経験のなかで相互作用的な活動性を持って意志的類比的に形成されている。従来のディルタイ研究に対する本研究の意義・成果は、新資料に基づいて、ディルタイ哲学を「現実と経験の哲学」つまり「意志的・類比的経験としての現実形成の哲学」として解明し、提示できた点にある。

なお、以上の成果は、本研究費によって継続的に開催した「ディルタイ・テキスト研究会」において意見交換・相互批判・評価を行いながら、以下に記載の雑誌論文と研究発表において公表してきた。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 山本幾生、Von der Identitaet des Willens und Leibes zur wirklich wirkenden Welt. Ein Weg von Schopenhauer zu Dilthey. 『文学論集』（関西大学文学部紀要）、査読無、60巻3号、2010、43-60頁。
- ② 山本幾生、ディルタイと J. S. ミルラー〈類比による連関〉と〈帰納による普遍〉、『ディルタイ研究』（日本ディルタイ協会）、査読有、21号、2010、54-67頁。
- ③ 山本幾生、斉一性から見る構造と構造連関の意味形成 — ディルタイ全集第21・22巻を中心に、『ディルタイ研究』（日本ディルタイ協会）、査読有、20号、2009、129-156頁。
- ④ 山本幾生、鏡の比喩から見た意志の現示—ショーペンハウアー、『ショーペンハウアー研究』（日本ショーペンハウアー協会）、査読有、14号、2009、60-81頁。
- ⑤ 山本幾生、意識の分裂と意志の現示—ショーペンハウアー、『ショーペンハウアー研究』

(日本ショーペンハウアー協会)、査読有、  
13号、2008、135-156頁。

[学会発表] (計6件)

- ① 山本幾生、現実と経験の哲学：デイルタイとヒューム、デイルタイ・テキスト研究会(第20回)、2011.2.12、於：慶應義塾大学(三田キャンパス)。
- ② 山本幾生、機関誌に見る日本のショーペンハウアー研究の変遷、日本ショーペンハウアー協会全国大会、2010.11.27、於：東京大学(駒場キャンパス)。
- ③ 山本幾生、J.S.ミルとデイルタイ、デイルタイ・テキスト研究会(第11回)、2009.12.13、於：アルカディア市ヶ谷(私学会館)
- ④ 山本幾生、デイルタイ全集第21・22巻における Gleichmaessigkeit (斉一性)の意味変遷と、そこから見えてくる Zusammenhang (連関)と Struktur (構造)の意味規定、デイルタイ・テキスト研究会(第4回)、2009.2.10、於：慶應義塾大学(三田キャンパス)。
- ⑤ 山本幾生、鏡の比喻から見た意志の現出、日本ショーペンハウアー協会全国大会、2008.11.29、於：立正大学。
- ⑥ 山本幾生、Will and Body, Society Meeting: Schopenhauer Research in Asia, WORLD CONGRESS OF PHILOSOPHY, 2008.8.2. Souel National University.

[図書] (計1件)

- ① 小笠原道雄、大野篤一郎、山本幾生、(編集・校閲・翻訳)、デイルタイ全集第6巻、法政大学出版局、2008、総頁数827頁。

[その他]

ホームページ:

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~ikuoyama/lecture/DiltheyText.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山本幾生(YAMAMOTO IKUO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号: 00220450

### (2) 研究協力者

上島洋一郎(UESHIMA YOICHIRO)

関西大学大学院・文学研究科・DC